井上ひさしの『雨』と井原西鶴の「俤の似せ男」と

――「二人妻／夫」説話の系譜をたどって

みなもと　ごろう

一九九七年の夏、ロンドンのソーホー地域の一角にあるプリンス・エドワード劇場で、ミュージカル『マルタン・ゲール　Martin Guerre』を観ていた。

一五六〇年のことである。カソリック軍の一員のマルタン・ゲールが、友人のアルノ・ドュ・ティールに、自分の生い立ちを語っているところに、プロテスタント軍が、突然襲撃してくる、アルノを助けようとしてマルタンはかえって自分が重傷を負う。戦場の混乱の中で、アルノはやむなくマルタンと別れる結果となり、友人は死んだと思う。その後、アルノは、マルタンの最期を告げに妻を訪ねる。ところが、彼が村に着くや否や、あたりは突然の沛然たる雨に見舞われる。それまで干天の災害に苦しんでいた村はそれによって救われる。マルタンの家族や村人は挙って「放蕩息子の帰還」とばかり、身分を明かす間もなく、彼を迎え入れる。

舞台の出来事が進行するうちに、この物語は、井上ひさしの戯曲『雨』（一九七六年七月「野性時代」）に似ていると漠然と思うようになっていた。私の恣意を避けるために、最新の第三者に手になる梗概を次にあげる。

…拾い屋の徳は、両国橋の橋下でかなり年輩の親孝行屋に「羽前平畠藩の紅花問屋「紅屋」の御当主喜左衛門」と間違われたことが契機となり、喜左衛門の平畠一美しいと思われる女房・おたかを一目見たさに江戸から北上し、当主不在の紅屋に喜左衛門の振りをして潜り込む。当然、容姿が似ているだけで中身まで真似が出来ない徳は、周囲からは偽者ではないかと疑われるが、都合が悪くなると「天狗隠しで言葉も脳味噌も抜かれた」と誤魔化し、また平畠弁の習得に励み喜左衛門になりすますことに成功する。

しかし、徳に〈天狗隠し〉では取り繕いきれない危機が次々と起こる。突如現れた江戸の乞食仲間の釜六に、正体を暴露すると強請られたことで彼を殺害し、喜左衛門の愛人で、その出奔の真相を知る芸者の花虫を殺し、本物の喜左衛門を見つけ出して彼に毒を盛ったことで、徳が徳であることを証明できる人間をこの世から消してしまう。だが、これらはすべて平畠藩と紅屋が仕組んだ罠であり、そこに嵌ってしまった徳は、喜左衛門の身代わりとして自害させられてしまう。（鴨川都美「雨――挺身という悲劇について」、近代演劇史研究会編『井上ひさしの演劇』翰林書房　二〇一二年一二月一日刊）

では、なぜ「罠」が仕掛けられたのか？　喜左衛門の工夫と実験とに拠る紅花栽培に藩の財政を全面的に依存する平畠藩では、幕府の酷税に対する抜け道として、紅花の不作を偽る。ところが、強欲な巡察人にそれを発見され、見逃す代償に、毎年千両の生活費を添えておたかを妾にすることを要求される。それに我慢できず、喜左衛門は彼を切り殺してしまう。改易を免れる唯一の方法は、喜左衛門一人に全責任を負わせることであるが、そうしては藩の財政は立ち行かない。

「罠」であるから、当然、喜左衛門は番頭の金七に助けられて息を吹き返し、喜左衛門の弟助左衛門として、おたかの夫に納まることになる。花虫について言えば、彼女は喜左衛門の生殺与奪の鍵になる「紅花栽培秘法」を預かるというプロット上の役割があり、彼女の喜左衛門への思いはともかく、彼の方は、色と実益を兼ねた二股の便法であったかどうかは、わからない。

そこで、ミュージカルの方のその後の展開はというと――アルノは事実をマルタンの妻ベルトランドに語って、村を去ろうとするが、せっかくの幸運が逃げないようにと、村人にさえぎられる。二人のあいだにはいつしか真実の恋が芽生えてゆく。やがて、生きていた夫マルタンが姿を現すが、幼い頃の政略結婚で、肉体的にも精神的にも関係を持てなかった夫に、今は何の思いもないとベルトランドは告白する。恋敵の陰謀もあって、一家は村人たちの暴動に襲われるが、今度は、マルタンをかばってアルノが深手を負う。マルタンは、友情の名のもとに彼が、今はプロテスタントに秘かに改宗したベルトランドの腕の中で息を引き取ることを許す（このミュージカルについては、FIRST NIGHT RECORDS のレーベルで出ている一九九八年のツアーリングカンパニーのキャストによるCD『Martin Guerre』によって改めて物語の確認をした）。

さて、帰国して、早速、この物語についての文献を探してみると、『マルタン・ゲールの帰還　16世紀フランスの偽亭主事件』（ナタリー・Z・デーヴィス著　成瀬駒男訳　平凡社　一九八五年一一月一五日初版発行）に行き当った。この書の帯が簡潔に内容をまとめているので、取り敢えずそれを引くことにする。

近世初頭フランスの片田舎、失踪した農夫〈マルタン〉は、村に舞もどり再び〈妻〉と暮らすが、三年を経て、男は偽せ者、詐欺師だと訴えられる。〈妻〉は〈夫〉だと言い張り、村人の証言は真っ二つ、時あたかもその裁判のさ中に片脚を失くした〈本物〉が帰還する。……。無名の農民の奥深い感情と隠された野心の世界を、迫真の物語として描き切り、〈事実〉と〈可能性〉の複雑に交錯する〈歴史〉を鮮やかによみがえらせて、欧米の歴史学に深い衝撃を与えた問題作。

訳者の解説によれば、「ここ十数年の間に、短期的または中期的時間枠を用いて、性格の明確な社会部分に考察を限定する歴史学がめざましい成果をあげてきてい」て、具体的には「『チーズと蛆虫』のモンティアレと並んで『マルタン・ゲールの帰還』のアルティガといった辺境の微小部分に依拠して全体を撃つという戦略は、生産性の高いスタイルとして今後も大いに用いられるのではなかろうか」と、「新しい歴史学」におけるこの書の特質が述べられている。今はその「新しい歴史学」には、立ち入らないことにする。

〈ほんもの〉か〈にせもの〉かの判断にある種の身体的特徴の相似が語られるのは避けられず、疣だの傷などに触れられるのは当然

として、私が、興味を持ったのは、方言をめぐっての記述が裁判の記録に出て来ていることである。「被告がほとんど完全にバスク語を知らなかったことについては『生まれつきのバスク人がバスク語を話せない』ことなど考えられないという理由から、それは、彼がマルタン・ゲールではないことを意味するとも取れたが、ただ単に、ごく幼いころラブール地方を離れたので、先祖の言語は実際上一度も習ったことがないというふうにも解された」という、第一言語としての方言を話すことが出来なかったという指摘である。因みに、ゲール一家は彼が幼い頃バスク語を話すラブール地方を離れ、ガスコーニュ地方のアルティガで農家として産を成している。

さらには、ベルトランド・ド・ロールという名の妻に関して「彼女は『操正しく、立派に』生きてきた女性であり、司教戒告状によって示された情報もそれを裏付けていた。彼女は三年以上もの間、この未決囚とベッドを共にしており、「もし被告が本当にマルタン・ゲールではなかったら、こんなに長期間、前記ド・ロールが、彼を別人だと気づかぬはずがなかった』。彼女は、義父と彼女の母に盾ついて何ヵ月も彼は自分の夫だと言いとおしたし、体を張って彼を危害から守りさえした」という記述もある。事実として、彼女は「未決囚」との間にも子供ができており、彼が〈にせもの〉となれば、彼女は姦通の罪を犯したことになり、それによって生じた子供はいわゆる私生児で、それはまた財産の継承の問題をも引き起こすことになる。つまり、カトリック社会にあっては将来にわたって一家は呪われることになる。

一読して、この書物の偽のマルタンすなわちアルノと『雨』の主人公「拾い屋の徳」とは、その行動や情況に似通ったことがあるのだが、翻訳はともかくフランス語版の『Le Retour Martin Guerre』の Edition Robert Laffont の初版ですら、一九八二年の発行というのだから、どう考えても、そこに直接の影響関係はあり得ない（翻訳は翌年の英語版によっている。また、フランスではこの研究をもとにした映画も作られて公開されているというが今は触れない）。

結局、一九九七年の時点では、この歴史書と、『雨』という戯曲とのあいだの類似点は、直接にはありえず、将来何かこの作品について述べることがあるとすれば、いうところの「二人妻／夫」説話の世界的な伝播というフィールドの中で考えてみるしかないだろうなという印象を持つ程度で終わった。

その「二人妻／夫」説話を私がどのようにイメージしているかについて、いくつか例を挙げておくことにする。まず、あまりにも有名なアルフレッド・テニソンの『イノック・アーデン』がある。さらに『万葉集』の、高橋虫麻呂や大伴家持らが歌った「菟原娘子」（これらをもとに森鷗外は戯曲「生田川」を書いている）、『伊勢物語』の「筒井筒」の章など挙げていたらきりがない。『雨』では、おたかの立場に注目すれば、喜左衛門と徳との二人の〈夫〉を持つことになり、喜左衛門に注目すれば、おたかと花虫という二人の〈妻〉を持つことになる（花虫もまた喜左衛門と徳の二人〈夫〉を持つと言えるかも知れない）。よく知られている鶴屋南北の『東海道四谷怪談』では、田宮伊右衛門はお岩を見捨てて、隣家伊藤喜平宅の孫娘のお梅を妻に迎える。話の進んだ「深川三角屋敷の場」では、お岩の妹のお袖は、父左門、姉お岩、夫与茂七の仇を討つための助けを得るために、言い寄る直助権兵衛と表向き夫婦になっている。父と夫の百か日の喪が明けた日に、決心して床入りをすること

にする。丁度二人が枕を交わし終えたところに、死んだと思った与茂七が帰ってくる。お袖は身を恥じて、二人の男に同時に殺される計画を立て、また実際そうなるが、いまわの際に、直助とお袖が実は兄と妹だとわかる。畜生道に落ちたことを知った直助も、自害して断末魔の虫の息で、それを告白する。つまり、「四谷怪談」の場合は、言わば二人〈妻〉と二人〈夫〉との複合形の先蹤ともいえるのである（二人妻伝承については、檜谷昭彦氏の『未練の文学　二人妻伝承考』（ＮＨＫブックス　昭和五五年一二月二〇日第一刷発行）が、通時的にその広がりを記述している）。

＊

『雨』については、二〇一二年になっていささか「牛にひかれて善光寺参り」風ではあったが、考えねばならない機会が偶々あったので、もう一度〈マルタン・ゲール〉をめぐる物語を確認しておこうと、文献を探したところ、アレアクサンドル・デュマに「マルタン・ゲール」という物語があることを知った。日本語訳はないので、Dodo Press 版の英訳で読んでみた（この書には刊記がなく、原作の詳しい書誌については dumaspere. com を参照されたい）。

戦場でスペインとフランスに分かれたよく似た二人の男が出逢う。一方の男の重傷を看病するかによそおい、彼の生い立ちから家族関係などを聞き出して、結局は、彼は死ぬのだからとそのまま遺棄して去ってしまうのが、物語の発端である。この出会いはミュージカルに踏襲されて、ミュージカルの種本としてはこのデュマの物語も参照されているかも知れない。

物語のポイントは、夫が〈にせもの〉と知ったベルトランドの心の悩みが克明に描かれているところである。結末は、マルタンの出現で、〈にせもの〉と断定されたアルノは、判決に従ってとマルタンの家の前で絞首され火刑になる。と同時に、ベルトランドは、彼との間にできた子供とお腹の中の子供とともに死ぬ。〈にせもの〉とベルトランと子供の三人の遺体は火によって清められた土にともに葬られる。結果的には、男は死刑によってこの世のこれまでの罪を贖い、女は、自らの意志によって将来にわたる贖罪を果たすわけである。

ジャネット・ルイスの『マルタン・ゲールの妻／The Wife of Martin Guerre』という小説が一九四一年に出版されていて、日本では一九九三年一月に森道子訳（英宝社）同二月に杉浦悦子訳（水声社）の二種の翻訳が出ている。私は後者の新装版（同年六月）で読んだが、これは幼い子供たちの結婚の儀式から始まり、一人の女性の成長の様子が地方色豊かな環境の中で描かれている。

この物語では〈にせもの〉のほうがずっと好ましい人物として現れる。これは、聖職者を始め周囲の誰もが、失踪中の人生体験による成長と受け止めて、彼をマルタンと信じて疑わない。ベルトランドにとってもそれは喜ぶべきことであるが、実はそれこそが〈にせもの〉である何よりの証拠という、言わばダブル・バインドの情況に追い込まれるのである。そうした情況の中で日増しに膨らんでゆく姦淫の罪に対する意識が克明にたどられている。マルタン・ゲールの歴史的な経緯の何処に注目し何をくみ出すかという点では、自らの声を発することのできない「妻」という地位のありようが、明確に意識されている。

そこで、始めに触れたデーヴィスの歴史書を、今度は、『帰って

きたマルタン・ゲール　16世紀フランスのにせ亭主騒動』と改題された平凡社ライブラリー版（一九九三年一二月一五日初版）で改めて読み直した（翻訳がより洗練されているので、先に引用した本文もこの版によっている）。ところが、そこで、思いもかけない記述に出会うことになった。なんと、新しく書かれた解説の冒頭に訳者の成瀬氏はこう書いている。

……訳者と同じ大学で日本文学を講じる秋葉直樹教授よりご教示いただいたことだが、マルタン・ゲール事件に似た筋書の話が西鶴の『懐硯』にあるということだ。「案内知つてのむかしの寝所」と「俤の似せ男」がそれだが、その中で展開される、前夫の離村、妻の長年の待ちわび、新夫の登場と嬉し涙は、共通した要素だ。とくに似ている「俤の似せ男」のあらすじは以下のようなものである。日向のとある村の与太夫という有徳の大百姓が、裂けた茶小紋の羽織を残して消息を絶つ。女房は子を育てて、九年待つ。その頃村続きの百姓伝介が、凶作に嫌気がさして離村し、乞食をして歩いていたところ、安芸の国のお堂で同じお国言葉を使う男に出会う。見ると与太夫そっくりだ。伝介が与太夫よ、と呼びかけ、互いの身の因果を嘆くと、男は、わしは与太夫ではない。小平太といい、大隅の国の者だと言う。伝介は顔かたち、打ち傷まで同じであるのに驚き、彼の失踪のことを事細かに話す。と、相手は、横着な考えを起こし、与太夫の妻をたぶらかし、楽に世を渡る計略を思いつき、わざと阿呆づらをして「天狗にさらわれた者」と触れ歩く。それを伝え聞いた与太夫の妻は相手のもとを訪ね、嬉し泣きし、男を家に連れかえり、添い寝の枕を交わす。が、その夏は格別の日照りで、青田の早苗は枯れ芝と化す。住吉大明神の御本所は、前の旱魃の時にも祈願してご利益があった。その願書は与太夫が書いたので、彼にその依頼がいくが、小平太は字が書けない。目はしの利く男がいて、前回には書けた人が、今度は駄目というのは妙な話で、これは与太夫ではないと見抜くが、女房は夫が無筆になったのは天狗の一件で気が抜けたせいと言い、やがて銘々の好き好きだ、というところに落着し、別にかまうものもいなくなる。ここでは、天狗の話が、男が相手の所に押しかけずとも効果的に女房の気を引く手段として、また無筆をごまかす煙幕として使われる。が、本物の夫の帰還がないために、二人の対決といった緊迫した事態はなく、結末はもうひとつ盛り上がりを欠く。

さらに、成瀬氏は、先に挙げた『イノック・アーデン』にも多少の類似が見られると、その梗概を紹介している。そちらの方にも少し脱線してみる。これはむしろ「案内知つて昔の寝所」と同類型の話と思われる

淡路の家島の漁師北岸久六は、ある年、嵐に遭ったまま行き方知れずになる。夫婦仲はよかったのだが、音信の絶えたまま一年が過ぎ、周囲の勧めに逆らいきれず、同じ浦のやはり漁師小磯の木工兵衛とやむなく再婚する。その夜、床入りも済んで寝込んだ後に、久六が帰ってきて、おもわず添臥をする。朝になって判ってみれば、脇に木工兵衛が寝ていた。久六は落ち着いてこれまでの経緯を語り、まず妻を刺殺し、次に木工兵衛を打ちすて、最後に自身もその刀で自刃する。先に触れた「三角屋敷の場」と全くの同類で、ここでもよく知られた先例を挙げれば、「伊勢物語」の二十四段の「あらた

まの年の三年を待ちわびてただこよひこそ新枕すれ」の歌にちなむ説話がある（余談の余談で恐縮だが、久しぶりに開けてみた所蔵の『伊勢物語』に「イノック・アーデンの説話、東海道四谷怪談」という私自身のメモを見付けた）。

＊

何のことはない、わたしは『雨』と〈マルタン・ゲール〉という視点であり、秋葉直樹氏は西鶴の「俤の似せ男」と〈マルタン・ゲール〉という視点だったわけで、遠回りではあったが、そうなれば、『雨』と「俤の似せ男」という視点が当然のこととして結びつく。（『雨』の冒頭に登場して、徳を誘惑する親孝行屋が、「杢兵衛」と名乗っているのは、『懐硯』によっていることの、井上ひさし一流の種明かしだったのかもしれない）。

私としては、『雨』の材原の一つとして、「俤の似せ男」があるのではないかということを言えばこの稿の用は足りる。秋葉氏の指摘を成瀬氏がまとめた梗概を一読すれば、繰り返しになるが、「狗品につかまれしもの」ということを方便とすることや、雨乞いの願書について、女房が「物書きたまわぬ（ママ）は天狗につかまれて氣のぬけたゆへ（ママ）」（引用は『決定版対訳西鶴全集五』による）とかばう点だけでも、貸借関係は瞭然で、事細かく喋々する必要はないだろう。関心のある人に細かな研究は譲りたい。

むしろ、高度にそして精密に専門化したと言われる近代文学研究にも思いもかけないクレバスがあって、そこに見事に嵌った自分の情けなさを素直に告白したい。学生時代に謦咳に接したかつての碩学からの、そんなことも知らなかったのかという叱声が聞こえて来そうな気がするのである。

＊

もとより、『雨』にも、既に一九七三年七月に「新劇」に発表された『藪原検校』にみられるような、バフチンのカーニバル論の影が射していることは確かで、そのことはまず踏まえなければならない。ただ、材原ということであれば、扇田昭彦氏が様々な解説で、発端の突然の雨に降りこめられて主要な登場人物が集まることと、言語を通してアイデンティティの喪失が描かれていることとを挙げて、バーナード・ショーの『ピグマリオン』との類似を指摘している（この点に関しては、新潮文庫版「雨」（昭和五八年九月二五日刊）のものが、一番詳しい）。確かに蓋然性の高い指摘だと思われる。

そうしたレベルでの材原ということであれば、私は、ベルトルト・ブレヒトの『男は男だ』（一九二六年初演）を挙げておきたい。

二十世紀初頭。インドに戦闘を展開するイギリス軍の機関銃隊の四人の兵士は、略奪の証拠を湮滅するために仲間の一人を隠す。が、点呼の時には四人が揃わなくてはいけない。そのために、夕食の魚を買いに出たアイルランド出身のゲーリー・ゲイという男を代理に仕立て上げる。彼は、欲望と命惜しさにすっかり彼らの罠に嵌り、仲間の一人ジェライア・ジップに仕立て上げられる。妻でさえ「ほんとに、この人をよく見ますと荷揚げ人夫の私の夫のゲーリー・ゲイとはちょっと違ってるようですわ。どこが違っているかはっきり言えませんけど何か違います」と言わせるほどである。因みに「ゲーリー・ゲイ一家の者はアイルランドじゃどこにいっても釘の打ち方を心得ている奴だって何度も何度も言われますよ」と語るが、

拾い屋の徳が、目の前に釘を置かれると本性を発揮してしまうように彼の場合も「釘」が、アイデンティティとかかわる。

この作品は「人間はいつでも取り替えられるが、証明書がなくなったら、もうあがったりだ」というセリフにあるように、人間のアイデンティティが如何に脆いかを描いたものである（これに倣えば『雨』は、江戸弁という証明書を失った徳の物語ということになる）。「証明書」通りのジップになりきったゲイは、姿を現わした、「証明書」を持たない本物を否定し、他の三人以上に兵士として見事な殺人鬼に成長する。

『男は男』では、暗に明にプロットの進行に関わっているのが、雨で、例えば「お前は今晩、雨の夜でもこの後家の肉体なしで過ごせると思うか?」と、四人の兵士が員数揃えの際に最も恐れる軍曹は、自らに言い聞かせる。（以上は、岩淵達治訳『ブレヒト戯曲全集2』（未来社　一九九八年五月三〇日刊初版第一刷発行）によるが、この作品はすでに一九六五年に河出書房の『グリーン版世界文学全集17巻』に収められている）。岩淵氏は、注で「雨の日は色欲が高まるというイメージはブレヒトにしばしば出てくる」と指摘している。この軍曹は、その色欲ゆえに失敗して自峙心を失い、自ら去勢する。この場合は、ある意味で雨は、人間の欲望とそれによる自己喪失とに根源的にかかわっていると言える。

＊

これまで、井上ひさしの『雨』をめぐって、ほとんどは無用と思われる論議を重ねてきたのだが、それは『雨』のプロット上の根幹をなす出来事は何かという私なりの問題意識とかかわるからである。

その出来事とは、おたかの、徳の「鈴口の疣」が喜左衛門と同じだという証言だと、私には思われる。いささか言葉遊びをすればprivate partsが、public relationsを保証するという逆説が一篇の趣向なのである（様式的に言えば、艶笑劇（erotic farce）の見かけをとった思想性の高い喜劇（high comedy）ということになる）。つまり、徳を徳たらしめ、喜左衛門を喜左衛門たらしめているのは、このおたかの、閨の出来事をめぐっての確信犯としての嘘ということになる。

そうした役割を担うおたかの核心的な形象は、〈にせもの〉と初めて枕を交わす際の衣装で、それは、「白っぽい浴衣のおたかが白手拭をさげ白い影のように現れる」と、ト書きにはある。言うまでもなくこれは白無垢を思わせ、花嫁衣装や死に装束の礼服を意味する。このあたりの展開については、既に触れた鴨川論文に指摘がある。おたかは、「あんだとはじめて肌ばあわせだどぎ」の浴衣だと語るが、読むのではなく舞台としてみるときは、この言葉の真偽よりは、衣装の異様さに目を向けさせるセリフである。そこで、いよいよ床入りというところで、この場は終わるのだが、その瞬間は次のごとくである。

おたか（どこかへ向かって祈るように）清三様、堪忍（かに）しておごやえ……

暗くなる。杵の音が再び聞こえて来、さらにその上に瓦屋根を激しく叩く雨の音が加わる。

この場面は、当然、終幕の場の、御公儀巡見使との対面の場のト書き「何気ない会話（やりとり）を交わしながら、おたかは徳に着物を着せて行く。ただし、おたかが着せるものはすべて白ずくめ」（傍点本文通

り）という設定と一対になっている。

つまり一つの象徴的な「死」を以てもう一つの現実の「死」を購うというのが「雨」全編を貫くプロットということが出来る。もちろん、喜左衛門には「鈴口の疣」などなかったという本当の秘密を知る花虫の犠牲も、その変奏であることは言うまでもない。材原論という観点からは、全く無駄だと思われる〈マルタン・ゲール〉や「二人妻／夫」説話に悪くこだわったのは、このプロットの意味を考えてみたからであって、まさに「妻」であること「夫」であることからくる苦悩にあれほどこだわった伝承の人物たちの持つエネルギーが、「雨」の言わば、平畠藩の政治的な陰謀事件の顛末の表相からは殆んど姿を消しているからである。

しかし、それは、あくまでも表相から消えたかに見えるだけで、プロットから見れば、真のの犠牲者は、拾い屋の徳ではなくて喜左衛門の女房であり、次いで花虫だということになる。物語は、確かに徳が身代わりになった喜左衛門の切腹で、男たちの世界である政治の上での決着はつく。が、おたかと、今度は、喜左衛門が成り済ました、彼の弟助左衛門との新しい夫婦には、それぞれ、徳との関係、花虫との関係が、自己を責めるにも相手を責めるにも、おそらくトラウマのように残るわけである。建前を果たした二人に本音の日常がどう展開するのか、プロットがもたらした現実が彼らを待っていることになる。つまり、古今東西の「二人妻／夫」説話が抱えてきた、男女の問題が目の前に広がることになる。

この、言語化されず、何処にも行き場のない、夫婦のあいだに孕まれたエネルギーこそが、この作品の潜在的なテーマと言えはしないか。もし、『雨』が政治を描いたというなら、相思相愛の夫婦にこうした煉獄の現実をもたらすことこそが、まさに政治だとも言えるのである。

付記　この論は、いわゆるアカデミックな学術論文の書き方を意図的にしていない。私の思い付きを捨てて、何食わぬ顔で自分の発見のように、『雨』と『懐硯』との関係を論ずる方が、ある意味で効果的だったかも知れない。でもそうしなかった。嘗て、そして近年読んだ書物の次のような個所が心に残っていたからである。

Science is a procedure for testing and rejecting hypotheses, not a compendium of certain knowledge. Claims that can be proved incorrect lie within its domain (as false statements that meet the primary methodological criterion of testability). But theories that cannot be tested in principle are not part of science. Science is doing, not clever cogitation; we reject *Omphalos* as useless, not wrong.

Stephen Jay Gould, *ADAM'S NAVEL AND OTHER ESSAYS* (London 1995) p.12

Stylistically I have taken the liberty of using the first person singular when this seemed the clearest and most honest way of phrasing the point. I have taken other small stylistic liberties – all within the boundaries of good academic practice, or so I hope – believing that historical enterprise has little to gain from the stylishic ascefticism practised in the sciences, and indeed that an artificially dry turn of phrase does more to obstruct lucidity than improve it. In all this I hope I have not fallen prey to narcissism. My wish is always

simply to communicate.

Daniel M. Vyleta, Crime, Jews and News *Vienna 1895 - 1914* (New York 2007) p.11

もとより、最近の精緻な文学研究の動向に、能力的について行けないことも事実であるが、講義や演習での試行錯誤や脱線を含めた学生との対話の延長のつもりで、この文章を書いた。したがって注なども付けない体裁を採った。

なお、マルタン・ゲールの話は、モンテーヌが『エセー』第三巻第十一章「びっこについて」で取り上げていて、原二郎訳の岩波文庫（昭和四二年一〇月一六日第一刷発行）では、注としてはやや詳しく「マルタン・ゲール事件」としてその大体の推移がまとめられている。井上ひさしが、おぼろげながらでも、あらかじめマルタン・ゲールの基本的な経緯を知り得た可能性は、全く無ではない。